

欧州統合の「記憶の場」ヴェントターネ島に渦巻くイタリア政治

八十田 博人

(共立女子大学国際学部教授)

「8月22日にレンツィ首相がフランスのオランド大統領、ドイツのメルケル首相とともに、ヴェントターネ島を訪問する」と、イタリアの通信社、新聞が速報で伝えたとき、これまでイタリアと欧州統合の関係を考えてきた筆者も、驚きを禁じえなかった。欧州連邦主義運動の歴史的文書「ヴェントターネ宣言」が編まれた地として知られるこの離島(ラツィオ州のフォルミア港から高速艇で1時間、カーフェリーで2時間)は、イタリアの政治家たちが折に触れ、ここを訪ね、イタリアの欧州主義の立脚点を見つめ直す場ではあっても、そこを他のEU加盟国の首脳、特に仏独両国の首脳が訪問するようなことは、まずなかったからである。

もちろん、今回の訪問は、イギリスの国民投票でEU離脱派が勝利した後に、EU原加盟国にしてユーロ圏の中核である三国が欧州統合のミッションを再確認する機会であったことは間違いない。また、三人でヴェントターネ宣言を起草したアルティエーロ・スピネッリの墓を詣でるだけでなく、共同記者会見を地中海で難民救助に当たるイタリア海軍の軽空母「ジュゼッペ・ガリバルディ」の甲板で行ったのは、この機会に欧州内での存在感を強めたいイタリア側の意気込みを示したものだ。欧州統合の真の中核である仏独両国にとっても、欧州が危機の中にあり、イタリアをつなぎとめておかねばならない時期だからこそ、このような「イタリアの欧州モノ尽くし」のイベントも可能になったといえるだろう。

一方、イタリア国内に目を向ければ、レンツィ首相は、イタリア中道左派の伝統に立ち返り、その欧州主義の旗幟を鮮明にする必要があった。2013年の勝者なき総選挙の後の混乱をひとまず収束させたレンツィは、首相就任直後の2014年の欧州議会選挙では民主党に40.8%の支持を集め、外相に就任したばかりのモグリーニをEU外務・安全保障政策上級代表に送り込み、2015年にはユーロ危機以後の停滞から経済を成長に転じさせたが、もはや就任当初ほどの人気はない。今年の第2四半期には再び成長がゼロとなり、イギリスの国民投票の後には、かねてからイタリアのユーロ残留・離脱を問う国民投票を呼びかけているポピュリスト政党「五つ星運動」が再び攻勢を強めつつあった。

レンツィ首相は元来、同じ中道左派出身のナポリターノ前大統領やレッタ前首相のような、熱い「欧州派」では決してなかった。ナポリターノは、晩年のスピネッリが欧州議会で超党派・超国家の議員グループ「クロコダイル」を率いて欧州連合条約草案を採択させたときに協力した、旧共産党きつての「欧州派」である。2006年の大統領就任直後にも、当時のプローディ内閣の「欧州派」3閣僚、アマート内相、パドア＝スキオッパ経済・財務相、ボニーノ欧州政策・国際通商相を同道して、ヴェントターネ島を訪問している。そして、2013年の総選挙後の混乱の中で大統領に再選されたナポリターノが中道左派、中道右派、中道の3派連立政権の首班をレッタに委ねたのは、欧州担当相や欧州議会議員だった経歴も評価してのものだった。

そのレッタを民主党内部から引きずり下ろし、フィレンツェ市長から首相に就任したレンツィには、「欧州派」としての前歴は見出しがたい。しかし、そのレンツィも、2016年1月に、自分と同じ民主党で旧「マルゲリータ」(旧キリスト教民主党左派を中心とした勢力)出身のフランチェスキーニ文化財・文化活動相とともに、ヴェントターネ島を

訪問している。その時もヴェントターネ島にあるスピネッリの墓に花を手向けたが、同時に同島から2キロの小島、サント・ステーファノ島も訪問している。ちなみに、三首脳が記者会見を「ジュゼッペ・ガリバルディ」艦上で行ったとき、背後の海上に映っていた二つの島は、左の長く大きい島がヴェントターネ島、右の丸く小さい島がサント・ステーファノ島である。

サント・ステーファノ島にはブルボン王朝時代に作られたパノプティコン型の監獄跡が残っているが、ここには歴代大統領のなかで最もイタリア人に愛された、サンドロ・ペルティエーニが1929年から1年間、収監されていた。ペルティエーニはその後、ポンツァ島の収容所を経て、新たに建設されたヴェントターネ島の政治犯収容所に移送され、そこでスピネッリと親しくなっている。

同じカトリック左派の出身の前任者レッタの否定から始まったレンツィは、中道左派とはいっても、思い切った歳出カットなど、遅れてきた「イタリア版ブレア」のイメージの改革派であり、「白」(カトリック)でも「赤」(左派)でもない「ロゼ」だと評する人もいる。内外に向けた発言もしばしば挑発的であり、左派版ベルルスコーニ、ないしは「ベルルスキーニ」(小ベルルスコーニ)とも言われる。しかし、40歳になる前に首相に就任した若々しいレンツィの積極的な言動によってこそ、消えそうで消えない中道右派の人気者ベルルスコーニを中道左派がようやく凌駕することができたともいえる。

しかし、そうした政治姿勢は、現在レンツィが自らの進退をかけて進めている憲法改正国民投票(12月4日投票)に民主党内部からも反対者が出ているように、むしろ伝統的な左派支持層の一部から反発を受けている。もともと民主党内の最大勢力の旧共産党(PCI)・左翼民主党(PDS)・左翼民主主義者(DS)出身でなく、中道左派を代表して多くの要職を占めてきたカトリック左派からリベラル(プローディ元首相・元欧州委員長、ルテッリ元副首相・元ローマ市長、マッタレッタ現大統領など)の間に位置するレンツィが、その左派性や欧州主義志向を明らかにするにもヴェントターネ訪問は必要なことであったのだ。

もちろん、ヴェントターネは左派の独占物ではない。あれほどEUと軋轢を繰り返したベルルスコーニが率いる中道右派からも、欧州委員会副委員長になったタヤーニが中道右派系の若者たちとヴェントターネを訪問して、自分たちは欧州統合推進派だとアピールしたことがある。

とはいえ、ヴェントターネに収容された政治犯の最大勢力は共産党であり、それに次ぐのがアナキストや社会党员、そして「正義と自由」の活動家などであった。彼らが解放後に対独・対ファシスト抵抗運動の指導者となり、それが現行の共和国憲法につながっている。もはや存命者も少なくなっているイタリア・パルチザン全国協会(ANPI)の英雄たちが、国民投票の賛否両派に応援を期待されているのは、このためであり、これにもレンツィは応える必要がある。つまり、今回の国民投票には、レンツィの政治的生命とともに、イタリア共和制の歴史的評価と将来像がかかっているのだ。